5 または10のかたまりを作って数えることを大切にしていた。

(2) 研究協議会より (パネリスト：夏坂哲志，田中寿幸，大野桂，盛山隆雄)

- ・ 授業者反省から，子どもは，本来，自分に力で「できるようになりたい」「わかるようになりたい」という意欲をもっている。そして，子ども同士でもある程度学び合っていくことができる。もしかして，それができないと思いついていてのは教師かもしれない。どうしても教えよう，しかも効率的に教えようという意識が強いあまり，子どもの力を信じずに教師の教えを押しつけてしまうことが多い。だからこそ，「もっと子どもたちの力を信じ，子どもたち同士の学び合いで創っていく授業」を目指したいと考えている。子どもたちは，教室を広い講堂の最前にかえて，しかも初めての大量の参観者の中で，普段と変わらないような様子で堂々と自分の意見や考えを話して伝えていた。子どもへの発問の仕方，子どもの意見やちょっとしたつぶやきの拾い上げ方，理解を図るために丁寧な補説，仲間同士で考えを伝えたり授業の中で広めたりする時間など，授業者の「もっと子どもの力を信じ，子どもたち同士の学び合いで創っていく授業」を目指す思いが十分に伝わってくる授業だった。
- ・ パネラーからは，本時のねらいは100のかたまりを意識させて110は100と10を合わせた数であることある。しかし，本時は全体で11行あることから，10が11個あると推測させることではないという指摘があった。100より大きい数については，5や10のかたまりをもとに数を数えることもできるが，本時ではより100のまとまりに注目して100玉そろばんの活用ができる工夫が欲しかったとの意見がだされ指摘をしていた。

午後の特別テーマ：「小学算数と中学数学の連携を考える」

(3) 公開授業 第6学年 「比例・反比例」 授業者：山本 良和先生

(4) 公開授業 附属中学校第1学年「関数」 授業者：北島 茂樹先生

(5) シンポジウム 小・中連携を，関数の授業を切り口にして議論

ア 内容の連携は・・・

イ 授業づくりとしての連携は・・・

ウ 思考力，表現力はどのようにして育てるのか。そのための連携は・・・

(6) 授業中は数学的な考え方・態度面に焦点化するために

ア 子どもたちの力を信じること。

イ 育てたい数学的な考え方を明らかにすること。

ウ 一人一人の顔がよく見えるようにすること。

エ 数学的な考え方を残す場面を設定すること。

4 感想

今回の筑波大学附属小学校の公開授業に参加して，授業者をはじめパネリストの方による研究協議会やシンポジウムでは，白熱した議論を体感することができた。

授業者に共通して言えることは，子どもたちを的確に捉えるために，関心・意欲・態度，数学的な考え方，表現・処理，知識・理解の4つの観点から授業を組み立てていくこと。その際，単元あるいは本時の評価規準を考え，指導に生かす評価計画を考えていることである。つまり，評価規準を考えることとは，「基礎・基本を明確にすること」である。そこで，今回の授業公開にあたり，授業中でなければ見えにくい関心・意欲・態度や数学的な考え方の指導と評価に焦点をあてて「授業づくり」を考えていることである。

また，子どもたち同士で教え合い，学び合っていくためには，それぞれの友達の状態がわかり合える場面が必要である。子ども同士が多様な考え方に触れることで，自分自身の考え方を豊かなものにする。算数科の目標に，「算数的な活動」「活動の楽しさや数理的な処理のよさ」という文言が入ったが，授業の中に活動を取り入れて，一人一人の顔が見えるような活動でなければならぬ。すなわち，「多様な考え方が生まれてくるような活動」を用意することが大切である。そして，そこから出された多様な考え方と自分の考え方と比べてみることにより，見方・考え方がより豊かなものになってくることを実感できた公開授業だった。改めて自校の学校課題研究を反省するよい機会となり，今後の取り組みに少しでも生かしていきたい。